經濟論叢 毎月一日發行
第四十七卷第六號昭和十三年十二月一日發行
大正四年六月二十一日第三種郵便物認可

京都帝國大學經濟學會

經濟論叢

第四十七卷　第六號

昭和十三年十二月一日發行

論叢

幕末の出貿易……經濟學博士　本庄榮治郎
投資節約の均等について……文學博士　高田保馬
商品リンク制の發展……經濟學博士　谷口吉彦

時論

日本銀行の國債引受と財政經濟……深井英五
戰爭の意義と共同體的國内革新の急務……經濟學博士　石川興二

研究

獨逸の植民問題……法學士　前田稔靖
中小工業としての下請制工業……經濟學士　田杉競

說苑

鉋屑錄……法學博士　財部靜治
農業經營に於ける日支の異同……經濟學士　菊田太郎

附錄

彙報
外國雜誌論題
本誌第四十七卷總目錄

（禁轉載）

農業經營に於ける日支の異同

菊田太郎

一、序言

廣東・武漢の攻略により、事變は長期建設の段階に入つた。その差當つての目標は、治安の確保と經濟開發とであらうが、兩者と密接な關係を持ち、その制約となるものは、實に、支那社會の本體をなす農村の狀況、支那人口の八割を占めると稱せられる農民の生活安定の問題である。

支那各地の農產物、特色ある農法・農具、或は農村狀態一般等に關する記述は、從來少くなかつたが、支那の農業經營が具體的に如何なる構造を持ち、如何に運營されてゐるかは、殆んど知られなかつた。この未知の領域に始めて鍬を入れたのは、ロッシング・バックの功に歸すべく、その著 Chinese farm economy, 1930 及び Land utilization in China 1937[1] によつて、有機體としての支那農業經營の性格、並びにその置かれてゐる環境が、略々殘る所なく分析されてゐる。之を繙讀することによつて、支那自體は勿論、我が特色ある農業經營の理解にも、裨益する點が少くないが、特に興味を惹くのは、農業經營に於いて日支兩國が根本性格を等しくし、しかも現在の發達程度ではかなり輊輊あること、從つて、我が國の經驗が支那農業の復興・開發に少なからざる寄與をなし得ると考へられること、之である。今、その點を少しく略說しやう。

勿論、バックの調査は前著では七省・一七地方に於ける二、八六六農場、後著に至つては二二省・一六八地方に於ける一六、七八六農場、三八、二五六農家を包括するとは云へ、對象の複雜性を考慮するとき、單に一斑を窺はしめるのみである。更に、我が農業に關する帝國農會の農業經營調査、或は農林省の農家經濟調査は、何れも少數の選ばれた農家に關する標本調査である。從つて、兩者を比較對照して得られた結論は決して絕對的のものではないが、大體の輪廓を知るに

1) 譯本は二種宛あるが、本稿では東亞經濟調査局刊、支那農家經濟研究、及び改造社版、支那の農業を用ひた。

は充分であらう。

二、狹小なる經營面積

日支兩國の農業經營に共通な根本性格、卽ち、經營面積の狹小なこと、耕地の分散せること、主穀組織であつて養畜部門の貧弱なること、勞働集約的なること等々を規定してゐるのは、農業經營數或は農業人口に比して、耕地が狹く、擴張の餘地も甚だ少ない事である。

我が國が耕地に惠まれないのは、起伏の多い地形を顧るとき、直ちに明白である。然るに、地大を誇稱する支那も、巨大なる農業人口に比し、耕地は著しく限定されてゐる。詳言すれば、先づ、大陸的な氣候に伴なふ極端な大雨、或は乾燥は、肥沃な表土の流失、或は鹽分の堆積を生ぜしめ、次に、人口の壓力による山腹・丘陵の階段耕作は、森林・草地たるべき斜面を荒廢せしめ、表土の流失、下流の氾濫を生ぜしめる。また、人口增加の主要動因たる强靱な家族制度は、耕地

中に散在する墓地の保存增加によつて、耕作面積を狹める。[2]

かくて、耕地面積、作付延反別を比較するに、

	支那[3](單位ヘクター)			日本[4](單位反)	
	北部平均	中東部平均	總平均	中經營平均	小經營平均
耕地面積	三・三八	一・九八	二・七三	三〇・一〇九	一五・七三
作付延反別	四・七二	二・四四	三・八六	三〇・八三	一七・四三

であつて、生產力劣る北支那は兎も角、中東支那の耕地面積は、我が小經營に少しく超えるのみであり、作付延反別では却つて及ばない。假令、帝國農會の調査が優良農家に係るものであつても、支那にも福建省連江縣の耕地面積(中位數)〇・六〇、作付延反別(中位數)〇・七三ヘクターと云ふ實例さへあつて、耕地面積の狹い我が國を標準にしても、支那農業の經營面積の狹小なのに、驚かされざるを得ない。

かく經營面積が狹小なために、單位面積よりの食料生產を極大にすることが必要になり、土地は牧場や飼料作物に充當されず、專ら、種實作物が栽培される。

2) L. H. D. Buxton: China; the land and the people, 1929, p. 70 ff. G. B. Cressy: China's geographic foundations, 1933 (日本外事協會版、支那滿洲風土記、p. 92 ff.)
3) 一ヘクターは大體我が一町步に相當するため、支那農家經濟研究 p. 58/9 による。
4) 帝國農會(昭和十年度)農業經營調査書、p. 29, 16

	勞働家畜						生産家畜					
	水牛	牛	驢	騾	馬	駱駝	豚	羊	山羊	鷄	家鴨	鶩鳥	牛	蠶	蜂
支那全土	〇・二四	〇・四三	〇・三三	〇・〇八	〇・〇七	*	一・〇一	〇・六〇	〇・一六	四・〇六	〇・四八	〇・〇四	〇・〇五	〇・〇九	*
小麥地帶	*	〇・五一	〇・四七	〇・一七	〇・一一	*	〇・五二	一・二五	〇・二五	二・八一	〇・〇四	*	〇	〇	〇・〇一
水稻地帶	〇・四一	〇・三七	〇・〇四	〇・〇一	〇・〇四	〇	一・三七	〇・一四	〇・〇九	四・九九	〇・八一	〇・〇六	〇・〇八	〇・一五	*

* 0.05 以下。

從つて、農家一戸當り各種家畜（但し蠶は弗で示せる蠶卵の價格蜂は巣數）數は、右[5]表の如く、極めて少ない。

これを貧弱と稱せらるゝ我が農家の一經營當り家畜飼養數、養蠶掃立卵量[6]

	養畜					養蠶		計
	馬	牛	豚	鷄	春蠶	夏秋蠶		
中經營	〇・五	一・二	一・一	五九・八	二〇・七	二九・一	四九・八	
小經營	〇・二	〇・九	一・三	二九・〇	二七・〇	三七・五	六六・五	

に比較しても、少しも勝つてゐない。殊に、經營面積の比較的廣い北支卽ち小麥地帶に家畜數の少ないことは、積年の天災と打續いた戰亂の結果、或はその植民地性の故に、經營狀態の如何に窮迫せるかを示すもので、悲慘と云ふべきであらう。

三、作物に見る集約度

農業人口・農業經營の多數なる結果、狹小な耕地に押込められた農業は、勢ひ耕種部門特に食料作物の栽培に集中せざるを得ないが、その有樣は、作付反別中各種作物の占むる百分比を示す左表[7]によく窺はれる。

	穀類	豆類	油種類	以上の種類混植	總計	實類	纖維類	根菜類	果物	蔬菜
支那全土	六八・五	九・九	三・六	三・四	(八五・四)	三・六	三・三	〇・九	一・一
小麥地帶	六八・二	一三・〇	二・一	五・一	(八八・四)	三・八	三・一	一・三	一・二
水稻地帶	六八・七	七・六	四・七	二・二	(八三・二)	三・五	三・五	〇・五	一・一

これに對して、我が農業經營に於ける各種作物のそれ[8]を見れば、

5) 支那の農業 p. 295
6) 農業經營調査書 p. 17.
7) 支那の農業 p. 256.
8) 農業經營調査書 p. 16.

	稻	麥類	大小豆	菜種	其他穀菽	以上計	綠肥飼料作物	馬鈴薯	甘藷	蔬菜	果樹	桑
中經營	四・五	一六・一	一・九	一・三	二・八	六六・六	一四・六	一・〇	一・五	八・二	三・八	三・一
小經營	三九・七	一七・五	一・六	二・九	二・七	六四・四	一二・七	一・〇	一・四	八・九	四・一	六・四

以上の如き構成を持つ支那農業の著しい特徴は、餘り勞働を要しない代りに、食料品の供給量も少ない乾草が、殆んど作付されてゐない事實であり、この點より見て、我が國や印度・ロシヤの農業と共に、歐米諸國のそれに比し、著しく集約的であると云ひ得やう。否、我が國よりも更に集約的とさへ云ひ得る。何故と云ふに、穀類・豆類・油種類の幾分かゞ綠肥・飼料に充當されるにしても、到底我が綠肥飼料作に及ばないと思はれるからである。

等しく主穀農業でありながら、我が國のそれと稍々異なる點は、豆類の割合が著しく高いことである。これ豆類が輸出商品として、また脂肪源として支那國民經濟上重要な地位を占める所以であるが、地力を維持し、人造肥料を殆んど用ひずして集約的な連作を可能ならしめてゐる有力な要素であらう。

飼料・綠肥の作付を缺き、穀菽の栽培に集中してゐる點で、著しく集約的なと云ひ得るけれども、支那の農業は、多くの勞力を消化し、單位面積當りに付、多額の收益を擧げるには、蔬菜・果實の生產、纖維原料・桑・煙草等工藝作物の栽培が少ない。殊に、我が國と比較するとき、この點に於いて集約度が高いとは云ひ得ない。

これについては、支那人の一般食料が精製品でないために野菜・果實を要しない、或は、纖維原料・桑は外國の競爭に打負けた等、種々の辯解乃至說明が行はれてゐるが、根本的には、國內市場が發達せず、市場生產を行ふには運送費用が高額に失するため、換言すれば、國民經濟の發展段階が低いためと解し得やう。現に、大都市近郊には、多少蔬菜に專門化した地域があり、市場の廣い棉花・阿片は增加してゐるからである。

この點と關連して、支那農業の商品生産化に論及するのを順序とするが、現在入手し得る資料間の偏差が過大であるから、後日に讓りたい。

四、結　　言

要するに、以上概觀した如く、比較的狹小な耕地を地盤に、多數の農業人口が生活してゐる結果、支那の農業經營は、一般に極めて貧弱である。殊に、一定の方式ととなく、窮すれば通じやう、通じなければ諦める式で、窮境に陷れば直ちに家畜を手放すと云ふ實狀であるから、戰亂・天災の後に於いて農村生活の安固充實を實現することは、必ずしも容易ではない。

併しながら、栽培作物の種類を觀察するに、市場・交通關係の不備から、勞力を消化し地力を發揮する有利な部門を發達せしめ得ず、不利を忍んで食料生産を主とする有樣であり、治安の開發、交通の整備、市場の擴大等を見るならば、その面目を一新しやう。特に、根本性格を大體等しくし、しかも數歩を先んじて商品生産化した我が農業に於ける、技術上・經營上・經濟上の貴重な經驗は、支那農業經營の發達、農村の安定に寄與し得る分野が廣いのではなからうか。農村合作運動を先驅とする農村工作の前途こそ、注目に値するものと云ふべきである。